

小説 木森山水道

挿絵 ゼフィド



見習いショタ騎士の
ハーレム学園性活

立ち読み版

第一話	ハーレム学園性活の始まり	006
第二話	王立騎士養成学園	034
第三話	寂しがり屋の淫魔	038
第四話	セカンド処女の魔女	098
第五話	背伸びする姫騎士	152
第六話	王妃の秘密	201
最終話	卒業後もハーレム性活	229

登場人物紹介

Characters



ノーラ
艶やかな青い肌した
高レベルの淫魔。



アナカタ
古びた館に住まう耳の尖った魔女。



メリナ・ピアラ・ハウシス
騎士を目指すプライドの高い少女。



ベット・ピアラ・ハウシス
年齢を感じさせない妖艶な美熟女。



ロウ
騎士養成学園へ入学する幼い少年。

「ひいひい！ いりませんよオ！ 許してくださいいいい！」

セックス好きの淫魔がセックスを拒む奇妙な光景に、ロウが小首を傾げた。

「怯えないでよ。仲間の仇を討つために傷つけたりしようっていうんじゃないだよ？ そりゃあ、ぼくのペニスと精液の味を牝孔に刻みつけながら早く満足させて、彼らがきみに負けたことを誰にも知られないうちに帰ってもらおうとは思ってるけどさあ……」

「そ、それですよオ！ 刻みつけるってところお……あ、あなたみたいな、淫魔よりも淫魔らしい人間にやられちゃったら……あなたから離れられなくなるじゃないですか……自由にセックスを楽しむ淫魔が、人間の男の子に束縛されるなんて格好悪すぎですっ」

「まあまあ、ノーラは淫魔なんだから、セックスを楽しんでよ」

嫌がる風に揺れだすヒップ。ロウは指を食い込ませ、力尽くで押さえつけた。腰を

グイッと押しつけ、快楽で脱力する女体の中心に肉棒を深く埋め込んでいく。

「あひいひい！ は、入ってくる……やめてって言ったのに……謝りますう、お仲間を襲ってごめんさいっ、すぐに立ち去って、二度とこの辺に近づきませんッ、ですからあ、あたしとセックスしないでえええ！」

「そう遠慮しないで。気持ちよくしてあげるから、ノーラの淫魔牝穴を味わわせてよ」
ポーヤ呼びしていた淫魔との力関係が逆転しているのはわかっていた。

慣れた風に、それに相応しい呼び捨てをする口ウは、主導権を握る者らしく、淫魔の泣き言を無視した。

「んああああアアアアア~~~~~い、いやあ……奥まで入ってきたああ……！」

根元までペニスを挿入された淫魔は、這いつくばりながら背筋を反らした。

「ああ……ひ、広がってますう……熱くて硬いペニスにヒダを奥の方にめくられながら、あたしのもの形が、その形に型どりされてえ、ハア、ハア、ドクンドクンっていう強い脈動で、膣全体が揺すぶられてるっ……太くて長いからあ、奥の圧迫感すごいっ！」

結合部から大量の愛液を溢れさせ、自分の太腿と口ウの下腹部をぐしよ濡れにする淫魔は、涎を垂らしながら目を見開いた。

「う、うそお、い、いきそう、い、入れられただけでイクなんて……入れられたときにイクのは、いつだって人間の男の方だったのに……ひ、ひあああああああ〜！」

淫魔の青い裸身がブルブルと波打った。

「ああ、ペニスが締まって気持ちいい〜！ 絶頂牝穴に締められて、アクメ振動を送られるのは最高だよ。イカせた達成感っていう、精神的な充足もあるし」

「そんな……淫魔のあたしが、ただ入れられただけでイッたなんてえ……ハアツ、ハアツ、ああ、どうしてあなたはイカないんですかあ……軽い絶頂……アクメだったとはいえ、淫

魔のイキ膺に与えられる快感に耐えるなんてっ……溜まってたんじゃありませんか？」

「これ位の刺激で精液出すなんて、もったいないじゃない……出すならさ、もつと蕩けるような快楽の中でたくさん出したいよ……そんなわけで、思い切りズンズンするね」

宣言したロウは、腰を打ち付け始める。テクニクは使わない。淫魔はほとんど骨抜きになっている。ならば、ひたすら直線的な、子宮口に若さを叩きつける責めの方が蕩けさせられる。経験豊富なロウは、そう判断し、一心不乱に責め立てた。

「流石は、そこそこ経験してるノーラの牝孔だね。ぼくのペニスの価値を理解して、歓迎してくれてる……たっぷり愛液を吐き出して、嬉しそうに絡みついてくるよ……ミミズ千匹っていうのかな。細かくて深めのヒダがさ、ペニスの隅々に抱きついてきて、しかも奥に引っ張ってくれる……堪らないよっ」

亀頭が抜けそうになるまで引き抜いては、柔尻に力強くペニスの麓を叩きつける深い抜き差しを行いながら、ロウが満足そうに口角を吊り上げる。

「子宮口もさ、べつたりぶつかるときも離れるときも、ちゅううううって吸い付いてきてくれる……すごく気持ちいいね……はあ……はあ……ノーラは気持ちいい？」

肉棒に射精衝動が溜まってきたのを感じながらロウが訊ねる。

「気持ちいいどころじゃありませんよオ、はあッ、あッ、牝孔のヒダのひとつひとつ

が甘く痺れてえ……あああ、心地よく意識が遠くなってえ……こんなに気持ちいいのは初めてですう……はあああ、や、やっぱり、忘れられなくなるう……他の人間と……牡とセックスする気持ちが失せていくウ……この子のセックスに堕ち始めてるうう……!!」

「セックスする気がなくなるなら、一生オナニーしてるといいよ。いいセックスの思い出をオカズにするオナニーも悪くないものだよ? はあ、はあ、思い出の中のぼくを好きに弄っていいからね……さあ、すぐく濃い精液を中出しされる思い出もあげるよ……!!」

淫魔の常識外れの具合のよさに、ロウのペニスは限界だった。

手コキ射精のとき以上に睾丸がせり上がる。肉棒の根元に集まった射精衝動は狂おしい。「さっきよりも出そうだよ……ああ、出すよノーラっ……人間のぼくが……真正面から戦えば絶対に勝てない弱いぼくがさ、逆に這いつくばらせながら思い切り中出しするよ!」

「ひいひいッ! ハア、ハア、やめてくださいよオ……快楽の首輪をつけてえ、あなたから離れられなくしないでエ!」

「中途半端でやめるのはよくないよ、はあっ、はあっ、ぼくに射精マーキングされなよ……膣に出された精液は、血管に染み込んで全身に行き渡る……ぼくにそんなことをされる機会は、もう二度とないかもしれないんだよ? 経験しておきなよ……ね!」

ロウは嫌がるヒップを力尽くで押さえつける。

平素ならば、はねのけられてしまうだろうが、快楽で脱力し、弱音をまき散らす今ならば、容易に制することができる。

そうして根元までペニスを埋めると、子宮口をドスドス突き回す。

「一番奥で出して、一滴でも多く全身に行き渡るよう協力してあげる……さあ出すよ……ぼくのマーキング精液……たっぷり出るよ………ツツツ！」

「お、奥は弱いんですよ、そんなに突かれたら、あああ、今度は深くイクツ、今まで経験したことのない極上アクメしちゃう……マーキングされながら極上アクメしたら、本当に離れられなくなるのいい、ああ、射精されながらアクメきめちゃう………！」
膣が小刻みに痙攣し始めたとき、ロウは降りてきた子宮口に思い切り亀頭を突き刺した。そのまま先つぼの肉全体でぐいぐい押しながら、思う存分吐精する。

ズブリツツツツツ！ ドビユウウウウウウ！ ドビユグググググウウウウウウ！

「ンヒイイイイイイイ！ ダメって言ったのに、出されてるううう！ アアア、アクメるううつ、中出しされながら、心堕ちアクメきめちゃうウウウウ!!!」

注ぎ込み、全身に拡散させる気持ちを入れて放たれた精液で、淫魔の膣が満ちていく。

「巨根の感触を刻まれた膣に出されてるウウ……臭さも、粘りけも、味も、全身に行き渡るウ……見えない首輪をはめられてるうう………!!!」



満たされていく……ハア……ハア」

亀頭を見つめる目が、少しずつトロンと弛んでいる。

呼吸は熱と湿り気を増やし、開き気味の口の端からは、だらしなく涎が垂れていた。

「ゆっくりじっくりペニスの感触を刻み込まれるのは気持ちいいでしょ？ その気持ちよさが、お姉さんが自分で閉じ込めていたいやらしい情動……女の悦びなんだ。これをたくさん感じさせてあげる。いっぱい楽しめる身体に目覚めさせてあげる……んっ、んっ」

ロウは手のひらの母指球付近に力を込める。

これまで通りの乳圧力をペニスにかける一方で、十指を妖しく蠢かせた。

指が届く範囲の乳肌を指紋の凹凸だけで丹念に磨き、軽く深くゆっくり素早く指を埋め込み、限界まで沈ませた状態で手首を激しくシェイクし、振動快感を送り込む。

「はあああ……はあ、はあ……なに、この感じ……う、うそ……指の愛撫が加わっただけで……こんなにもゾクゾクして……もっといやらしい快感が……あんんっ」

魔女は陸に釣り上げられた魚みたいに胸元をはねさせた。

鼻の下が伸びていた顔は悶え、歓喜の喘ぎが口から飛び出す。

「ふふ、アナカタお姉さんのオッパイ、いやらしい牝としての自覚を持ち始めてきたねほら。乳首が勃つてきた……ふうん、お姉さんの乳首って、案外膨らむんだ。ぼくのペニ

スと一緒だ。くすくすくす、とつても強い魔女お姉さんの乳首の秘密、知っちゃった」

「あああつ……いや……見ないでください……こんなボーヤに、こんなはしたない姿を見られる……ううん、引き出されたのだから……はあ……はあ」

「そうだよ。ぼくのペニスと擦れるうちに、アナカタお姉さんが押し殺してきた魅力が開花してきたんだ。ほら、自分のオッパイを見て。ペニスに伸しかりながら、乳首を勃起させてる爆乳をさ」

うながされるままに、魔女の視線が自分の胸に行く。

「はあ……はあ……なに、これ……自分の胸なんて、邪魔な肉の塊にしか思えなかったのに……ハア、ハア、ああ、なんていやらしいの？ 見ているだけで、胸の奥に退廃的な快感を覚えてしまう……は、発情してしまう……っ」

「それはね、見た目だけ立派だった爆乳が、色香を放ちだしているからなんだ。ぼくも感じるよ。今のお姉さんの肉釣り鐘爆乳。さつきよりも断然美味しそうに見える。ペニスを突っ込んでズリズリ抜くこのときが、すごく大切に思えてくる……一皮剥けて、犯す価値のあるオッパイに、変わってきているんだよ」

「ハアッ、ハアッ……な、なんなんですか？ オッパイの中のボーヤのペニス……今まで以上に熱く硬くなつて……こんなものと触れあっていたら、感触を忘れられなくなりそう」

「それはそうだよ。ぼくの色気たっぷりの巨根の存在感を、パイズリで刻みつけてるんだから。処女膜を捧げてもらったのに、下手なセックスしかなかった男のことなんて、思い出せなくしてあげる……はあ……はあ……」

汗ばみ始めた肉果実は、肉棒に心地よく吸い付いてくる。感触を楽しみながら、火照りだした爆乳の柔肉で強めに扱っていると、肉棒の鈴口から先走り汁が溢れだした。

「ああ、なんですか、これは……透明のお汁が……ハア、ハア、ハア、どんどん白くなっていく」「見るのは初めて？ 先走り汁だよ、はあはあ、じきに射精するっていうペニスの合図」
ロウは腰振りをどんどん速めていく。

睾丸がせり上がり、ペニスの根元で射精情動が渦巻いているのを感じ、射精が近いことを悟ったからだ。

「顔に思い切り出して、ぼくの精液を感じてもらおうよ……鼻が曲がるほど臭くて、逆さにしても垂れないくらいネバネバで、お湯みたいに熱いぼくの若いザーメン……さつきまでは無理だったろうけど、いやらしい牝として目覚め始めたアナカタお姉さんなら、きつと気に入ってくれるよ、ハア、ハア」

顔射するつもりで一心不乱に腰を振る。

手指の愛撫をやめ、閉じた手のひら全体で乳房を内側にぎゅうぎゅう押し、小さな手で



最高に乳圧を高めながら、魔女の襟ぐりに先走り汁をまき散らす巨根を抜く。ペニスは既にひりつく快感の塊となっていて、今にも射精しそうだった。

「い、いやですつ……精液なんか、顔にかけないでください……精液なんか顔に……ハアツ、ハアツ、こんなにすごいペニスの精液は、いったいどんなものなのかしら……それを顔にかけられるの……？ 顔にかけられたのを想像すると、どうしてこんなにも胸が高鳴ってしまうの……？」

顎を引いて胸元を見る魔女の顔は、熟したトマトのように真っ赤だった。

眉目はしどけなく垂れ、嫌悪の涙を流していた目は、期待の涙で潤んでいる。

「はあ、はあ、出すよアナカタつ、目にかかったら潰れてしまうから、ちよつとだけ目を閉じていて……早くつ、今、その綺麗な顔にきつたない濃厚精液を出すんだから！」

「は、はいっ……こ、こうですか、ハア、ハア……ああ、出されるのですね……わたし、精液なんかを顔にかけられるのね……！」

見下していた■■■■に呼び捨てにされたにもかかわらず、魔女は従順に目をつむる。

そうして、犬のようにせわしなく熱い吐息を出しながら、顔射される瞬間を待った。

「ああ、いいよ！ アナカタの顔、最高にいやらしい……エロくなってる！ 鼻の下を伸ばして、顔射待ちしてるそのエロ顔に……顔射なんかされたことがなさそうなセカンド処

し、次は牝孔を目覚めさせてあげる。嫌な思い出なんて、綺麗に消してあげるね」

半ば放心する魔女から離れたロウは、彼女の身体を這いつくばらせた。

スリットが腰骨から始まるロングスカートをあられもなくめぐり、お尻をすっかり露出させてしまう。

「フフ、ノーパンじゃないか……セカンド処女の割には大胆だね」

「いや……お尻全体に空気が当たってる……わたし、見られてしまっているのですね……館で研究しているだけだから別にいらなと思うていたけれど……こんなことなら穿いておけばよかった……」

「いくらものぐさでもショーツくらい穿かなきゃ……でも、穿かない方がよかったかもね。ぼくはこうしてすぐにアナカタお姉さんの牝穴が見れたし、もしもショーツを穿いていたら、愛液をたっぷり吸って使い物にならなくなっていたよ」

少し肉が弛んだムッチリとした太腿の間をじっくり見つめるロウ。

毛嫌いなあまりろくに性行為をしていないからだろう。

胸もお尻も豊満な割には、秘唇は処女に近いほど肉が薄い。満開に咲き誇る花ではなく、開花前のつぼみのようで、少し上の肛門も心なしか初々しい。

しかし、細く開いた秘裂からは、愛液がたっぷり流れている。左右の太腿の内側をべっ

姫騎士は薄く笑った。ロウは頷き、続けてふたつの呪文を唱える。ひとつめは、ペンダントを除いて全裸になるものだった。ふたつめの呪文が終わったとき、丁度話題になった物が現れた。彼女とアナルセックスをしたときに使ったローションの小瓶だ。彼は栓を開けると、既に勃起していた分身に透明粘液を塗りたくった。

「準備完了。さあ、ショーツを脱いで。スカートを腰までたくしあげてから、ぼくのペニスを自分でお尻の穴に入れるんだよ」

「わ、わかつていいるわ……ああ、ようやく、夢にまで見たアナルセックスができる……!」
ふしだらな笑みを浮かべた姫騎士は、ロウの指示通りの姿になった。普段は絶対にしな
いガニ股にまでなり、胡座あぐらをかいたロウのペニスに向かってお尻を落としていく。

グチュウ……ズニウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ!

「んはああああああ……この感じよお、この感じが欲しかったの……! 私、王女なの
に自分でお尻にペニスを入れてしまっているわ、ハア、ハア、あああ、こんなのイケナイ
のに、気持ちいい……ッ」

肛門内にローション塗れの巨根ペニスを咥え込みながら、姫騎士が全身を震えさせる。

「今回はパイプがあるよ。膣とお尻を同時にみっちり埋められると、クリトリスを弄られるのとはまた違った快楽なんだ」

自分の胡座にお尻を落ち着けながら、直腸を内部から押し広げられる快感を味わう姫騎士の秘裂に、特製パイプをねじ込む。

「ブジュウウウウウウウウウ！」

表面からローションを出しながら、パイプは膣をこじ開け、処女膜を押し上げた。

「ハアッ、ハアッ、私、膣も処女膜まで満たされてしまつてる……ああっ、本当にすごいっ……前も後ろも気持ちいい……っっっ！」

「動いてメリナ。ぼくが膝の裏を支えてサポートしてあげるから、思い切り上下に腰を振るんだ。オッパイを派手に弾ませながら、待望のアナルセックスを楽しみなよ」

「ええ、ロウっ、私やるわ……ああ、アナルセックス……アナルセックスううッ……！」

うわごとのように繰り返しながら、姫騎士は腰を振りたくる。

何度もロウにお尻を叩きつけ、ペニスと直腸が擦れ合う快楽を食った。

「アア、すごいっ、気持ちいいッ！ アナルセックス好き、ロウのペニス大好きい！」

「どうだいメリナ。姫騎士でも王女でもなく、怠惰な快楽を追求するだけのいやらしい性器に堕ちるのはいいものでしょ？」

「本当にそうだわっ、私、いやらしい性器に堕ちるのが大好きッ！ ハアッ、ハアッ」
恩返しという建前を使うことも忘れて、姫騎士は正直に告白する。

「はあ……はあ……これはすごいや……こんなに若い姫騎士……お姫様に、欲求不満の人妻みたいに欲望丸出しで腰を振られると、ペニスがすぐ熱くなって気持ちいいぞ……くっ……もう射精しちゃいそうだよ……！」

ガチガチに硬くなっている肉棒の射精情動が急速に高まるのを感じながら、ロウが呻く。「出してロウ！ 私、お尻の中に濃いのをたくさん出さりたいのっ……あの熱さ、あの粘り、あの量、あの重み……ああっ、思い出しただけでゾクゾクするうう……！ また私の中に出して、全身にあなたの精液を送り込んでえ！」

「フフ、そんなに欲しがられたら断れないじゃない。元から外出しする気はなかったけど、はあ、はあ、遠慮なく出すよ……王女様の肛門の奥に、ぼくの精液たっぷり出すからね！」勢いよくペニスを咥え込まれ、姫騎士が自分の胡座に深く座り込んだ瞬間——直腸の奥の奥まで龟头が届いた刹那に、ロウは思い切り精液を吐き出した。

ビュググググウウウウウ！ ドビュッ！ ドビュッ！

「んあああああ~~~~~！ 出てるっ……ロウの精液いっぱい出てるウウ！」

姫騎士は顎をはね上げて仰け反った。

満足そうな笑みを浮かべてしばらく硬直した後、ロウの胸板に背中を預ける。

「ふう……気持ちよかった……きみは満足した、メリナ」



「はあ……はあ、私も素敵だったけれど、もつとセックスしたい……快楽が欲しくてムラムラするの……王女なのはしたくないと思うけれど、とても我慢できそうにないわ」

瞳に情欲の炎を灯して言う姫騎士。

そのときロウは、樹木の陰から顔を出しているノーラに気付いた。一行の中では、姫騎士すら凌駕する淫魔は白い歯をこぼして親指を立てている。

どうやら既に手を打ってくれていたらしい。棒姉妹の長姉としての自覚が強い淫魔は、新しい妹となったメリナの悦びのために、音が漏れない結界でも張ってくれているのだから。遅くなったとしても、上手く立ち回ってくれるはずだ。

「続けよう、メリナ。気が済むまでつきあうよ」

「嬉しい……ありがとうロウ」

膝の裏を支えていたロウの手を握った姫騎士は、再び腰を上げたのであった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作フリームをルビは10年未満の方購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!